

『マザー・テレサ 幻想の家』

—援助者と援助される人たちをどのように苦しめたか

スーザン・シールズ著

『Free Inquiry』誌 Volume 18, Number 1 からの引用

『カトリック教徒になって数年経ったとき、私は神の愛の宣教者会というマザー・テレサの会衆に入りました。私は 1989 年に幻滅してそこを去るまで、ローマ、ブロンクス、またサンフランシスコで彼女のシスターのひとりとして 9 年半働いていました。再び世に戻ると、私が生きてきた嘘のもつれがゆっくりと解け始めたのです。私がなぜあんなに長い間彼らを信じてこられたかを不思議に思います。

宗教集団の根幹を成していたマザー・テレサの三つの教えは、シスターたちによって疑いもなく信じられているため、さらに危険なものとなっています。最も基本的なものは、シスターはただ従っていれば神の意思を行っているという信条です。もうひとつは、シスターたちは苦しみを選ぶことによって神に対する影響力を持つという信条でした。彼らの苦しみは神をとて喜ばせるというのです。そしてより多くの恵みを人類に分け与えるといわれていました。三つ目は、奉仕されている貧しい人さえ、人間へのいかなる愛情は神の愛を妨げるものであって、用心深く避け、すぐさま根絶してしまわなければならないというものです。いかなる愛情をも寄せ付けないというこの試みは、絶え間ない混沌と混乱、異動と変化をその会衆の中に生みだしました。マザー・テレサがこれらの信条を考案したのではなく、それらは第二バチカン公会議以前に宗教集団の中で行き渡っていたものであり、彼女はそれを推し進めるために（驚くほどの）全力を尽くしたのです。

これらの間違った教えを受け入れたなら、シスターはほとんど何でも行います。自分の健康を損ない、奉仕する対象を無視し、自分の感情や自由意思を遮断するのです。その人は苦しみを無視し、仲間の告げ口をし、簡単に嘘を付き、公の法律や規制を無視するようになります。

多くの国からマザー・テレサの働きに参加した女性たちは、貧しい人に仕え、自分たち自身が神に近づこうと期待を抱いてやって来ます。私がそこを去った時、世界中で約 400 の施設に 3 千人を超えるシスターたちがいました。マザー・テレサに導かれることを期待していた多くのシスターたちが、落胆した人となっていました。圧倒的なほどの証拠がある中で、幾人かが自分たちの信頼は裏切られたと最終的に認め、彼らが聞いていた命令は神からのものである可能性は無かったと認めました。彼らにとってそこを去ることは難しいことで—自分たちの自信は砕かれ、そこに参加した時に持っていた教養しか彼らは持っていないのです。私はそこを去る勇気が十分あったことから幸運な者だといえます。

聖さへの道といわれているこの偽りの教えに他の人も気付かれることを願って、私は知っていることのうちわずかを話しましょう。マザー・テレサの会衆に入ろうとする人は比較的少ないのですが、彼女の根本的な考え方が貧しさを軽減する障壁になっていることを知らないために支援している人が多くいます。大半の寄付金が不使用のまま彼女の口座に眠っていることを知らず、自分たちが貧しい人を助けているんだというようにその人たちも騙されているのです。

神の愛の宣教会の一員として、私の仕事は寄付金を記録し、感謝の手紙を書くことでした。お金が絶

えず到着するのです。郵便配達員はよく袋に多くの手紙をもってやって来ます。私たちは常に5万ドル（約500万円以上）やそれ以上の額の小切手の領収書を書いていました。時には寄附者が電話をかけてきて、金額が大きいためにすぐに気付くよう、小切手が到着したかを確認することもありました。私たちが覚えていられないとどうして言えるでしょう。私たちはもっと大きな額をたくさん受け取ることもあったからです。

マザーが公に語る時、彼女はお金の呼び掛けを決してしませんでした。が、“痛みを伴うまで”貧しい人ためにいけにえをささげることを実際に奨励していました。多くの人がそう実践し—彼女にお金を与えました。私たちは感動するような手紙をもらったり、時には貧しい人自身がアフリカの飢えている人たちや、バングラデッシュの洪水被害者、インドの貧しい子どもたちのためにわずかなお金を送ってきたりしました。大半のお金が私たちの銀行口座に眠ったままでした。

洪水のような寄付金は神がマザー・テレサを認めているというしるしだと考えられていました。修道院長たちからは、私たちが他の宗教団体よりも多くの贈り物を受けているのは神がマザーを喜んでいてからであって、また神の愛の宣教会のシスターたちが宗教的生活の真の精神に忠実だからだと言っていました。

大半のシスターたちはこの会衆がどのくらいのお金を蓄積しているか何も知りませんでした。また結局のところ、私たちは何も集めてはならないと教えられていました。ある夏にローマ郊外に住むシスターたちが自分たちが配りきれない程のトマトで詰まった木箱をもらいました。その年は非常に収穫がよく作物があったので、隣人たちの誰もが欲しがりませんでした。そこでシスターたちは腐らせてはならないと思い、トマトを缶詰にすることにしました。彼女たちがしたことをマザーが発見したとき、彼女はとても不機嫌になりました。物を蓄えるということは神のみわざを信頼していない証拠だということです。

寄付金はあり余り、銀行に預金されていましたが、私たちの禁欲的な生活は変わらず、私たちが援助している貧しい人たちの生活にもわずかな影響しかありませんでした。私たちは質素な生活を送っており、すべてのぜいたくを我慢していました。私たちは三つの衣服を持っており、それは破れてつぎはぎが出来なくなるまで繕っていました。また洗濯も手で行っていました。ホームレスのための宿泊所から持ってこられた終わることのないシーツやタオルの山も私たちは手で洗っていました。私たちの入浴は水ひと桶のみで終わりました。歯科検診や医療検診は不必要なぜいたくだと考えられていました。

マザーは私たちが貧しさの精神を保つことを非常に気遣っていました。お金を使うことはその貧しさを壊すということです。彼女の頭の中は、私たちの働きのために最も質素なものだけを使うことではいっばいのようなものでした。これは私たちが助けようとしていた貧しい人のためだったのでしょうか？それとも私たち自身の“聖さ”を向上させるために実際彼らを利用していたのでしょうか？ハイチでは貧しさの精神を保つために、シスターたちは針の先が鈍くなるまで再利用していました。鈍い針による痛みを見て、あるボランティアたちはもっと針を提供すると申し出ましたが、シスターたちは断ってしまいました。

私たちは何のお金も無いかのように地元の商人たちに食べ物と必要なものを頼み込みました。まれに寄附されたパンが尽き、地元の商店に頼み込んだこともあります。その願いが拒否されたときには、私たちの修道院長はその日にパン無しでスープキッチンを行うようにと命じました。

私たちに寛大に施してくれたのは商人たちだけではありません。航空会社は無料でシスターや積荷を運ぶことを頼まれました。病院や医者たちはシスターたちの医療費を肩代わりすると言われ、宗

教者のための基金から引き出しました。作業員たちは無給や、いつもより低い給料で働くように勧められました。私たちはスープキッチンや、宿泊所、またデイキャンプで、長時間働いてくれるボランティアたちに大きく頼っていました。

働き者のある農家は労働時間の多くを割いて、私たちのスープキッチンや宿泊所のために食物を集め、配ってくれました。「私が来なかったら、あなたたち何を食べるんだ」とその人は私たちに尋ねていました。

私たちは規約で必要以上のものを請うことは禁じられていましたが、実際物を請うときになると、銀行に蓄えられていた数百万ドルがあたかも存在しないかのように扱われていました。

長年にわたって、私は寄附者たちに数千の手紙を書き、彼らの贈り物のすべてが本当に貧しい人たちに神の愛をもたらすために使われたと言わなければなりません。私は文句を言う自分の良心に歯止めをかけることができました。なぜならマザーは聖霊に導かれていると教えられてきたからです。彼女を疑うことは信頼に欠くことの証拠であり、さらに悪いことには高慢の罪だと言われました。私は自分の意見を棚に上げ、いつかなぜマザーがそれほどのお金を貯めたがっているのかを理解できるよう願っていました。トマトソースを蓄えることでさえ神のみわざを信頼していないことだと彼女自身が教えてくれたのですから。』